

三重県南部地域における小学6年生の アルファベットの読み書き能力の実態

大野恵理*・萩野真紀*・須曾野仁志**

A Case Study of the Ability of Reading and Writing English Alphabets
among 6th Graders in the Southern Mie Prefecture

Eri ONO*, Maki HAGINO*, Hitoshi SUSONO**

要 旨

本研究では、三重県南部地域の小学校6年生の144人を対象に、どの程度、アルファベットの文字を正しく読んで、四線にブロック体で正確に書くことができるか調査した。大文字10問、小文字10問の1問1点のクイズ(20点満点)を実施した結果、平均正答率は14点であった。不正解が多かった文字は、M(60%)、n(60%)、j(50%)であった。不正解の回答の類型を分析した結果、四線通りに書けないことと、アルファベットの順番通りに書けないことが多かった。本研究に協力した144人の児童は「へき地」に住み、児童の多くが学校のみで英語を学習している。したがって、アルファベットの26文字の読み書きについて、教科書にある活動だけでは学習指導要領にある学習目標「活字体で書かれた文字を認識し、その読み方を発音することができるようにする」と「大文字、小文字を活字体で書くことができるようにする」という学習目標を達成するのは不可能であることが示唆された。

キーワード：小学校外国語、アルファベット、文字の名称、書くこと、聞くこと

はじめに

著者らは、三重大学教育学部の教員で、2017年より三重県南部地域の小・中学校の支援要請を受けて、外国語教育支援を行ってきた。この4年間に担当した出前授業は396回、教員研修は71回である。支援活動を通して複数の中学校教員から「アルファベットの文字の読み書きができない状態で、小学校から中学校へ進学してくる生徒が多い」と聞くことがあった。2020年度に全面実施の小学校学習指導要領(平成29年度告示)解説(文部科学省, 2017)の外国語活動・外国語編では、アルファベットの文字の読み書きについて、以下のよう

に記載されている。「読むこと」についての目標に、「活字体で書かれた文字を認識し、その読み方を発音することができるようにする。」とある。これは、Aという文字を見て /ei/ と発音することにあたる。また、「書くこと」についての目標は、「大文字、小文字を活字体で書くことができるようにする。」とある。これは /ei/ と発音されるのを聞いて、何も見ずにAという文字を四線上に正しく書くことを指す。

著者らが支援活動を行う三重県南部地域では、2020

年度以降、上記の学習指導要領解説にある「読むこと」と「書くこと」の目標を踏まえて、「小学校でアルファベットの大文字小文字の読み書きができるようにして、子どもたちを中学校に進学させること」と各校区小学校・中学校が申し合わせをしている場合が多い。しかし、「アルファベットが読めない、書けない」状態で入学してくる生徒が多くいるのが現実である。

2020年度の小学校学習指導要領の全面実施を踏まえ、2021年度用中学校の教科書では、アルファベットの読み書きについては、小学校で習得したとしたものとして扱われる。三重県南部地域で使われている中学校英語科の教科書『New Crown English Series 1』(根岸ほか, 2021)では、アルファベットについてはp.8~9に復習として触れられて程度である。つまり、小学校でアルファベットを習得していない生徒は、中学校でアルファベットの読み書きについて困難を感じたり、授業についていけないことにつながると考えられる。

そこで、本研究では、著者らが教育支援を行う三重県南部地域において、小学校を卒業する時に児童はどの程度、アルファベットの読み書きを身に付けているか調査し、実態を明らかにする。アルファベットの文字(例:A)には名称(/ei/)と音(/a/)があり、小学校

外国語では名称及び音を学習することになっている
(文部科学省, 2017)。本研究では名称について調査する。

先行研究

アルファベットの文字の名称の読み書きについて、日本語を母語とする子どもを対象にした研究は非常に限られる。村石・天野(1972)は、東北・東京・近畿から121の幼稚園を抽出し、幼稚園で無作為に抽出された幼児2217人にひらがなの読み書きテストを実施した。ひらがながほぼ完ぺきに読める5歳児クラスの幼児41人を特定幼児群として、アルファベットの大字の読み書きテストを実施した。

表1: 特定幼児群のアルファベット読みテスト正答率

順位	文字	正答率 %	順位	文字	正答率 %
1	Q	88.6	13	M	28.5
2	A	77.2	13	Z	
3	B	74.0	16	J	27.7
4	C	70.0	17	U	25.2
5	K	50.4	18	I	23.6
6	O	48.0	18	T	
7	X	41.5	20	V	23.6
8	S	39.8	21	F	23.6
9	P	35.8	22	E	22.8
10	H	34.1	23	Y	22.0
11	D	29.3	24	R	21.1
11	N		25	W	20.3
13	G	28.5	26	L	17.9

表2: 特定幼児群のアルファベット書きテスト正答率

順位	文字	正答率 %	順位	文字	正答率 %
1	A	66.9	14	T	21.9
2	B	58.5	15	I	21.2
3	Q	47.1	16	N	20.3
4	C	45.5	16	S	
5	O	43.9	18	E	19.5
6	X	37.4	19	V	18.7
7	K	35.0	19	Y	
8	H	32.5	21	G	17.1
9	P	28.4	22	W	
10	M	25.2	23	R	16.3
11	Z	24.4	24	F	14.6
11	D		25	L	
11	U		26	J	13.0

読みテスト(表1)では、70%以上の幼児がQ・A・B・Cを読むことができ、書くテスト(表2)では、40%以上の幼児がA・B・Q・C・Oを書くことが報告された。さらに、書ける字の読める字に対する割合は80%で、相関係数は0.86である。つまり、「読むことができたから書くことができる」と言うことである。しかし、S・G・Jについては、読めても書くことが困難であると報告された。しかし、読みテストや書きテストにおいて、どの程度の正確さで正答としたのかは示されていない。2020年全面実施された学習指導要領で小学校外国語が教科化され、高学年においてアルファベットの文字を書くことが指導することになり、中学年でアルファベットの文字を読むことが指導されることになった。アルファベットの読み書きについて、公立の小学校や幼稚園に通う低学年以下の児童や幼児を対象に調査することは現在では難しいため、貴重な研究である。

また、アレン玉井(2006)は、国立大学付属の小学校の高学年の児童302名を対象に、アルファベットの大字の聞き取りテストを行った。児童は聞き取った文字の順番に番号を付ける。26文字中14文字が正解率85%以上であった(表3)。さらに、アルファベットの大字の書き取りテストを行った。児童は聞いたアルファベットを書き取る。調査された11文字(A, B, H, J, K, L, M, N, O, R, W)のすべての文字において、正解率は80%を超え(表4)、村石・天野の幼児を対象にした研究と同じく、児童は「読むことができたから書くことができる」ことが明らかになった。

表3: 国立小学校のアルファベット読みテスト正答率

順位	文字	正答率 %	順位	文字	正答率 %
1	B	95	14	Y	85
2	K	94	15	M	84
3	T	94	16	Q	84
4	Z	94	17	S	84
5	H	93	18	O	83
6	I	88	18	A	82
7	P	88	20	D	82
8	U	88	21	V	82
9	W	87	22	E	81
10	J	86	23	F	81
11	N	86	24	L	81
12	G	85	25	S	81
13	R	85			

*Cは読みテストに含まれない

表4：国立小学校のアルファベット書くテスト正答率

順位	文字	正答率 %	順位	文字	正答率 %
1	A	95	8	J	85
2	K	94	9	O	84
3	O	94	10	W	84
4	B	94	11	N	84
5	A	93	12	M	83
6	K	88	13	L	82
7	H	88	14	R	82

*調査されたのは A, B, H, J, K, L, M, N, O, R, W のみ

さらに、小竹(2022)は、私立小学校1年生24名を対象にアルファベットを読むテストを行った。正答率が50%以上の文字は、B, A, C, O, T, Zの6文字で、A, B, C, Oについては、村石・天野(1972)の研究でもほぼ50%以上の幼児が正答することができており、アルファベットの最初の3文字については、日本語を母語とする子どもにとって、文字の形態を認識して読みやすい(名称を答える)と考えられる。その一方で、E, F, Lについては、3つの先行研究において正答率が低い。

表5：私立小学校のアルファベット読むテスト正答率

順位	文字	正答率 %	順位	文字	正答率 %
1	B	100.0	11	U	29.2
2	A	95.8	11	W	29.2
3	C	70.8	11	X	29.2
4	O	66.7	17	E	16.7
4	T	66.7	17	F	16.7
6	Z	50.0	17	I	16.7
7	S	45.8	17	J	16.7
8	P	37.5	17	N	16.7
9	K	33.3	22	H	12.5
9	Y	33.3	23	L	12.5
11	D	29.2	23	M	12.5
11	G	29.2	23	V	12.5
11	Q	29.2	26	R	8.3

小学校高学年で外国語が教科化され、アルファベットの文字の名称を読み、アルファベットを四線上に正しく書くことが指導されるようになって3年が経過した。しかし、公立の小学生がどの程度、アルファベットの大文字・小文字の文字を読み書きの力を付けて、中学校に進学するか研究がされていないのが実情である。そこで、本研究では、中学校進学前の小学6年生のアルファベットの文字の読み書きの力の実態を調査する

ことにした。

リサーチクエスションは、以下の通りである。

1. どの程度、アルファベットを正しい順番で書くことができるか。
2. 児童が正確に書けない文字は、どの文字か。

方法

1. 調査対象：三重県南部地域の小学校14校に在籍する小学6年生144人。
2. 調査時期：2023年2月
3. 調査方法：

① アルファベットクイズ開発

This is phonics 1 (粕谷・金子, 2012) を参考に、アルファベットクイズを作成した。氏名をローマ字(ヘボン式)で書かせ、大文字10問、小文字10問を書かせる(図1)。大文字小文字の合計20問は、アルファベット26文字の順番どおり四線に正確にブロック体で書くこととした。アルファベットクイズの所要時間は10分とした。クイズのフォントは、奈良教育委員会の公式ウェブサイトから無料でダウンロードができる Nara Penmanship を使った。このフォントの特徴は、四線がついたアルファベットの文字で、児童が教科書で目にして親しみがあるフォントに近いからである。ただし、この四線は、教科書で使われている3:4:3の割合の間隔の四線ではなく、均等の間隔の四線であるため、この四線に慣れ親しんでいない児童がいることが懸念された。

先行研究にある「各文字の名称が発音されるのを聞いて書き取る」形ではなく、「アルファベットの文字の順番の前後の関係で書く」形にした。これは、CDプレ

図1：アルファベットクイズの問題



ーヤ等を準備してもらった現場の負担を軽減するためである。また、読むテストについては、アルファベットの文字を順番通りに書くには、児童は「きらきら星」の歌を歌いながら書くこと推測し、「順番通りに書くことができれば、正しく読める」こととした。

② 手続き

クイズの実施について、各教育委員会を通して14の小学校校長に依頼した。14校では、年度の初めに、児童が調査等に協力するかの判断は校長に一任する旨の承諾を得ていたため、各校長の承諾を得てクイズを実施した。クイズは、外国語の教科の学習のふりかえりとして実施されたため、採点後に児童に返却した。

③ 評価

中学校英語科の教員の経験がある第一・第二著者が採点をした。評価一致率は95.5%であった。採点が分かれた文字については、協議をして最終的な採点を決定した。

結果

1. リサーチクエスチョン1:どの程度、アルファベットを正しい順番で書くことができるか

大文字10問、小文字10問の合計20問のクイズで、1問1点で採点をした。平均点は14.6点で、満点の児童がいる一方で、0点の児童がいた(表6)。

表6: アルファベットクイズ記述統計

人数	平均	標準偏差	最大値	最小値
144	14.6	5.2	20	0

2. 児童が正確に書けない文字は、どの文字か。

144人の中から無作為に抽出された20人のクイズを分析し、それぞれの文字について正答率と、不正解だった回答の種類を分析した。小竹(2022)の「錯乱肢の

表7: アルファベットクイズ不正解の回答の種類

	不正解の性質
①	鏡映
②	脱落
③	異配置
④	変容
⑤	四線通りに書けていない
⑥	順番が間違った文字
⑦	四線通りにかけておらず、順番が間違った文字
⑧	大文字小文字が間違い、順番が間違った文字
⑨	大文字小文字が間違い
⑩	無回答
⑪	順番が間違い、鏡映

表8: アルファベットクイズの平均点

	正解	不正解数・正答率 (%)	不正解の回答の種類 (度数)
1	E	1 95	⑤ 4線×(1)
2	G	6 70	② 4線×(3)、④変容(2)、③異配置(1)
3	K	5 75	⑥順番間違い(3)、⑤ 4線×(2)
4	M	8 60	⑤ 4線×(3)、⑥順番間違い(3)、⑨大文字小文字(1)、⑦ 4線×順番違い (1)
5	X	0 100	
6	Z	3 85	⑥順番間違い(2) (G)、4線×(1)、
7	Q	4 80	⑤ 4線×(2)、⑨大文字小文字(1)、⑩無回答(1)
8	S	3 85	⑤ 4線×(2)、⑩無回答(1)
9	J	4 80	①鏡映(1)、⑤ 4線×(1)、⑥順番間違い(1)、⑨大文字小文字(1)
10	L	5 75	⑤ 4線×(2)、⑥順番間違い(2)、⑪順番違いで鏡映(1)
11	b	4 80	①鏡映(3)、⑩無回答(1)
12	d	4 80	①鏡映(3)、⑩無回答(1)
13	h	3 85	⑥順番間違い(1)、⑨大文字小文字(1)、⑩無回答(1)
14	j	10 50	⑤ 4線×(4)、②脱落(2)、①鏡映(1)、⑥順番間違い(1)、⑨大文字小文字(1)、⑩無回答(1)
15	l	5 75	⑥順番間違い(3)、⑨大文字小文字(1)、⑩無回答(1)
16	n	8 60	⑨大文字小文字(3)、⑥順番間違い(2)、4線×(1)、⑧ 4線×順番間違い(1)、⑩無回答(1)
17	v	5 75	⑨大文字小文字(2)、⑥順番間違い(1)、⑦ 4線×順番間違い (1)、⑩無回答(1)
18	x	4 80	⑨大文字小文字(3)、⑩無回答(1)
19	p	3 85	⑥順番間違い(2)、⑩無回答(1)
20	r	4 80	⑥順番間違い(1)、⑦順番違い4線×(1)、⑧大文字小文字順番間違い(1)、⑩無回答(1)

類計」を参考に11種類に分類した(表7)。

大文字で正答率が高いのは、X(100%)、E(95%)、S(85%)、G(85%)で、最も正答率が低いのはM(60%)であった(表8)。小文字で正解率が高いのは、h(85%)、p(85%)で、正答率が低いのはn(60%)、j(50%)であった。20名の大文字の平均点は8.1で、小文字の平均点は7.5であった。

考察

本研究の調査に参加した144人の児童が住む地域は、最寄りの大都市まで、公共交通機関である特急に乗って2時間以上かかる「へき地」である。この地域には英語塾は少ないため、多くの児童は学校以外で英語を学習していない。また、教科書以外の教材等(例:ワークブック)を追加購入してアルファベットを書く練習はしていない。よって、144人の児童は、小学校3年生でローマ字(訓令式)を3時間程度学習し、補助教材を使って中学年でアルファベットの文字の名称の読み学習し、教科書を使って高学年でアルファベットの文字を書く学習をしてきた。つまり、4年間かけて教科書に従ってアルファベットの読み書きを学習してきた。しかし、アルファベットクイズ20問(1問1点)の平均点は14.6点で、教科書通りに学習してもアルファベットを完全に習得はできないことが明らかとなった。

このことから、現在の指導では、学習指導要領にある「活字体で書かれた文字を認識し、その読み方を発音することができるようにする」と、「大文字、小文字を活字体で書くことができるようにする。」という学習目標を達成できないことになる。『アルファベットが読めない、書けない』状態で入学してくる生徒が多くいる」という、地域の中学校教員からの報告は正しい可能性が高い。中学校進学時にアルファベットの読み書きを習得できていないという問題は、三重県南部地域だけの問題なのか、他の地域でもこの問題があるのか明らかにするために、調査が必要である。

また、144人から無作為に抽出された20人の回答の分析結果から、大文字で正答率が一番低いのがM(60%)であったが、これは小竹(2022)の私立小学校1年生でも、2番目に読むのが難しい文字である。日本語を母語とする子どもにとって、Mの文字の読み書きは難しいことが示唆されるが、本研究では、20人中8人が不正解であり、3人が四線通りにかけておらず、3人がNやOと回答していた。したがって、Mについては四線通りに正確に書く指導と、Mの前後のアルファベットであるLやNと合わせて読みを指導することが必要である。

先行研究がない小文字については、本研究では、n(60%)、j(50%)の正答率が低かった。nについては、大

文字のNと書いた児童が3人で、大文字と小文字が混乱していた。Jについては、基線より下に書くことができていない児童が4人いた。大文字に比べて小文字の指導は時間がかかるとされるが、20名のクイズの平均点は小文字に比べて大文字の方が低かった。したがって、小文字は時間をかけて丁寧に指導することが必要である。

本研究では、中学校英語科の教員経験がある第一・第二著者が採点をし、評価一致率は95.5%であった。採点が分かれた文字は、GとKであった。Gについては、形態が崩れてブロック体とは認識しづらいため評価者間で不一致となった。またKに関しては、大文字なのに小文字のように小さく書かれている場合に評価者間で不一致となった。地域の小学校教員から、「どの程度、アルファベットのブロック体を正確に書かなければいけないか基準が分からないから、正確な指導できない」という声をよく聞く。どういったケースが不正確となるか、例を示す必要がある。

まとめ

本研究では、ワークブック等の教材を使わず、補助教材や教科書を利用して、4年間、外国語活動と外国語を学習した小学6年生144人にアルファベットクイズを実施した。調査が行われたのは「へき地」で、児童の多くが学校以外で英語の学習をしない児童であった。アルファベットクイズで、大文字10文字、小文字10文字を順番通りに正しく書けるかを測定した。その結果、20文字のうち約15文字しか正確に書けていないことが明らかとなった。不正解が多かった文字は、M(60%)、n(60%)、j(50%)であった。不正解の回答の類型を分析した結果、四線通りに書けないことと、アルファベットの順番通りに書けないことが多かった。したがって、アルファベットの26文字の読み書きについて、教科書にある活動だけでは学習指導要領の学習目標を達成するのは不可能であるため、児童がアルファベットの読み書きを学習できる教材を用いたり、従来よりも時間をかけて丁寧に指導することが必要である。特に、大文字より小文字の指導には時間をかける必要がある。

アルファベットの読み書きを効果的に指導することにおいて、英語科の教員免許を持たない小学校教員が、正確なブロック体を指導することが難しい、と小学校教員からの声が聞かれる。今後、著者らは本研究で得た知見を活かし、児童が正しいブロック体を書けるようになる教材を開発する予定である。また、今後は他の地域でもアルファベットクイズを実施し、アルファベットの文字の読み書きについて、中学校に進学するまでに習得できているかを、三重県という枠を超えて

検証をしていく予定である。

謝辞

アルファベットクイズに協力してくださった 14 校の小学校の児童、クイズを実施してくださった先生方に感謝いたします。また、アルファベットクイズの実施や作成についてご助言をいただいた教育委員会の関係者の皆様に感謝いたします。

参考文献

- アレン玉井光江 (2006). 「小学生のアルファベット知識について」『ARCLE REVIEW』第 1 号, 72-81.
- 粕谷みゆき・金子由美 (2012). 『This is Phonics 1』mpi
- 小竹空翼 (2022). 「小学校における英語学習開始時に児童が有する英語の文字の知識」『小学校英語教育学会学会誌 (JES Journal)』第 22 巻, 150-165.
- 根岸雅史・日臺滋之・松沢伸二ほか (2021) 『New Crown English Series』三省堂
- 文部科学省 (2019). 小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説: 外国語活動・外国語編
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_011.pdf (参照日 2022.5.30)